釣れ釣れなるままに

２０１４年思い出の釣行記 PART.　１２

謎の白い塊

鹿島釣狂

趣味が一つ増えた

札幌竿道会の大会に参加させてもらおうと、女房に話すと「その日は孫のお遊戯会があるのよ。前々からお話ししてたでしょ。朝早くに出番があるので車で名寄まで送ってもらわないと、私見られないのよ」と窘(たしな)められてしまった。その日は、午後から釣りの準備をしようと考えて、午前勤務にしていたのだが、急遽シフトを変えて休暇にした。

さて、二歳になったばかりの孫のお遊戯会とやらを観覧に行くかと、朝早くに女房を乗せて名寄に向かった。保育園の会場に入っていくと、デジカメのフラッシュが眩(まばゆ)き、沢山のビデオカメラが三脚に乗せられていた。私も孫専用に購入したビデオカメラを回しながら幕が開くのを待った。ここで孫の登場となる。女房は舞台の幕が開くと、孫が泣き出してしまうのではないかと心配していたが、見事に気を付けの姿勢で登場したのだ。「♪ぼくらのクラブのリーダーは♪」とミッキーマウスマーチの音楽が鳴りだした。しかし、孫は直立不動のままである。他の男の子も動かない。さすがに女の子は暗幕の陰の先生の身振りに従って手足を動かしている。二番が始まった。何を感じたのか、孫が動いた。音楽に合わせて手が顔に向かったのだ。おっ、ようやく踊る気になったかなと、画像をアップにして見守った。しかし、手は鼻で止まってしまった。鼻をいじくり出して鼻クソを掘り始めたのだ。ビデオカメラの画像が揺れて止まらない。大声で笑うこともできずに、はあ、はあと息を吐き出す。女房がそのような私の姿を見て声を立てて笑った。とうとう私まで我慢しきれずに大声で笑ってしまった。周囲のお客さんもクスクスと笑っている。「♪みんなで楽しいジャンボリー　ミッキーマウス　ミッキーマウス　ミッキー　ミッキーマウス」で音楽が終わった。孫の鼻いじりは幕が閉まるまで続いていた。まあ、穿(ほじくり)り出した鼻クソを口に運ばないだけでも良かったか・・・。実は、孫が鼻クソを穿り出し終えた時に

「食え！食え！食ってしまえ！」と思ってしまった自分がいたのだ。私はいっそ、孫が歓喜の雄叫びを上げて走り回って欲しいとさえ思ったほどだ。何か一つでも芸を増やしてほしかったのだ。

いやー、実に楽しませてもらった。婿さんの両親も来ていたので、後からそのことばかりが話題に上る。女房が撮っていたデジカメの画像を見ると、気を付けと鼻いじりの姿の二種類しかなかった。何度もシャッターを切っていたのだが、その画像しか出てこないのだ。娘は、孫はちゃんと踊れるのだと主張して、ミッキーマウスの音楽をかけると、確かに音楽に合わせて踊っている。しかし、私たちは、ただ単に孫の三分間弱の雄姿を見るために来たのではなく、それを含めた孫の姿に触れたくて来たのだ。そして、孫の一挙手一投足をエサにしながら旦那の親御さんたちとの交流が深まったのも嬉しい事であった。あーぁ楽しかった。この話題は孫が大きくなっても続くのだろう。

私の趣味はご存じのように魚釣りだ。それ以外は趣味もなく仕事一筋に生きて来たつもりだ。それが最近は孫と触れ合うのが趣味のようなものになっている。魚釣りと同じようなドキドキ感を味わえるのだ。「食え！食え！食ってしまえ！」は、魚釣りをしていて、アタリがあった時に念じる心持と同じだったことに気づかされる。たとえ結果が出なかったとしても、魚が食いつくほんの一瞬に心をときめかすのだ。

岩見沢釣遊会第７回大会

前回の竿道会大会の境浜で砂塗れ（まみれ）になった竿を洗った。竿の継ぎ目にジャリジャリと砂が絡み付き、竿が伸びきらない状態になっていたのだ。まず、下栓を外して元竿の継ぎ目から散水ノズルをジェットにして水を注ぎこんでいくと、細かい砂が流れ落ちてきた。次に、竿を拭くために伸ばしていると、濡れた水のせいで意外と強く引っ張ることになってしまい、元竿と元上が固着してしまった。いつものように竿尻をコンクリート床に叩きつけたが収まらない。ドライヤーで竿を温めると固着が改善されると聞いていたので、そうしてみるがどうにも収まらない。仕方がないので継ぎ目に入り込んだ水が自然に乾燥するのを待つことにして地下室に放置した。

十一月十六日に開催される岩見沢釣遊会第七回大会が近づいてきた。これでだめなら釣具店に持ち込まなければならないなと、竿を垂直に立てて力任せに床に打ち付けた。ストトントンと元上が元竿にようやく収まった。いらぬ出費をせずに済んだとほっと胸を撫で下ろした。

今回の釣り場は、日高町の厚賀浄化センター前と早くから決めていた。夏の時期に厚賀港でタカノハ釣りをしていた時、防波堤の先端から見る風景の中に、昆布とりの磯舟が集結していたのが目に留まったからだ。そして、同じようにタカノハを狙った釣り人から、秋にはカジカが岸寄りする場所だと聞いていたのだ。

釣り場範囲の始点となる厚賀港から浄化センターまでは一㎞ぐらいの道程になる。すぐにでも歩き出せるようにとキャスターにリュックを取り付けてバスのトランクに入れてお

いた。そしてバスの中でも身支度を整えておいたのだ。しかし、現地についてみると、浄化センター前には竿先ライトが煌めいていた。五人ぐらいの釣り人が入っているのだろうか。センター前からさらにその先一kmほどにある賀張川河口でも、釣り人のヘッドランプの灯りが見え隠れしている。これでは諦めるより他はないだろう。

佐々木清氏が厚賀港左に向かった。ここもタカノハの実績があるところで心が動いたが、バスの中で岡氏からの誘いもあったので、通い慣れた新ひだか町の春立を釣り場とした。釣遊会に入会してからこれまで三度の優勝経験があるのも強みだ。今日の潮では前の盤に出ていくことは叶わないが何とかなるだろう。西川氏、岡氏と共に四区の浜に下り立った。

まずは岡氏を実績のある舟揚場に案内した。以前、暗いうちに平盤の前に出てカジカを大釣りし、明けてから５０㎝アップのアブラコをものにして一六〇〇点台をたたき出した舟揚場だ。この時は、その隣の舟揚場に入った故佐々木秀美氏が竿上げ間近に、これも５０㎝アップのアブラコをダブルで抜き上げてしまって、二位に甘んじた。私が次の狙いとしていた舟揚場には既に西川氏が竿を準備していた。

私は沖に大きな岩が見える舟揚場に入った。この舟揚場の岩盤の前では釣果が少なかったのだが、明けた満潮時間帯に遠投した竿にアブラコの大物が次々と食いついてきて優勝したことがあるのだ。今日は潮が高いので何とかなるだろう。

三脚にぶら下げるバッカンに水を汲もうと舟揚場前に下りていくと、海水が泥で濁っている。数日前から続いた大時化の影響で底荒れがしているのだろう。あまり期待は持てないなと思いながらも、二本の竿でゴロ天秤ネット仕掛けを駆け上がりに中投し、一本の竿は二本バリで遠投して周辺を探って行った。

しばらく打ち続けていると、ようやく竿先に弱いアタリが出た。それがピコン、ピコンとお辞儀するだけで食い込まない。「食え、食え、食ってしまえ」と心の中で叫んでいる。そのうちにガクン、ガクンと強いアタリが出て３５㎝ほどのカジカが上がった。そのカジカの口から融けかかったイワシが飛び出したので、重量が少しでも減っては敵わないと、もう一度口の中に押し込めた。これで坊主は逃れたわけだが、アタリはほとんど出ない。周辺の舟揚場に入った釣り人の様子を聞いて回った。誰もが口をそろえて駄目だという。そして、舟揚場近くに打ちあがっている白い泥の塊を指差して、これは何だろうと言う。周辺には魚の骨らしきものも見える。

ゴルフボール大の白い塊。それが浜に累々と打ち上げられていた

マイワシの大量打ち上げ

私たちが大会を開催しているこの区間の沿岸では、十一月三日以降、大量のマイワシの打ち上げが相次いで、三日から四日にかけて鵡川漁港、四日に春立漁港でも確認されていた。ひだか漁協が回収したところ約八トンになったという。浦河港には五日から六日にかけて、体長二十センチ前後のマイワシが大量に打ち寄せられたり、生きた魚群が回遊したりしているのが見つかった。港内にたまったイワシは推定百トン以上とも言われ、地元の漁協の職員らが回収に当たったほか、来遊を聞きつけた住民が朝から港を訪れてイワシをすくい上げ、時ならぬ「豊漁」に笑顔を見せたという。

専門家は「今月三〜五日にかけての暴風により海底の冷たい水が海面まで上がり、冷水を避けたイワシが港に逃げ込んで酸欠状態になったのでは」とみていた。そのマイワシを狙ったカモメが腹いっぱいになり飛べなくなったともいうことも聞いていたので、私たちが狙うアブラコやカジカも生きのいいマイワシで満腹状態となり、私たちの古ぼけたエサには食いつかないのではないかと心配されていたのだ。

釣り人が指し示すゴルフボール大の白い塊は、いったいなんなのだろう。割ってみると中に小石が混じった油粘土のようなものだ。粘々（ねばねば）と指に纏（まと）わりつき気持ちが悪い。それが累々と重なる浜に一歩足を踏み入れると、グニュグニュと埋まっていく。河川工事で海に流れ出した粘土が作り上げたものだろうか。どうもそうとは思えない。おそらく浜に打ち上げられた大量のマイワシの死骸から出た脂が砂を固めたものではなかろうか。

我々は、自然界で起こった現象を、今日まであまりにも無関心に過ごして来たが、起こった現象は、何等かの大きな意味がある訳で、もう一度考え直す必要があるのではと考えたりもする。イルカやクジラの群れが海岸に打ち上げられることもあるので、冷水を避けたイワシが港内に逃げ込んだというだけでは説明出来ない部分もたくさんあるように思う。

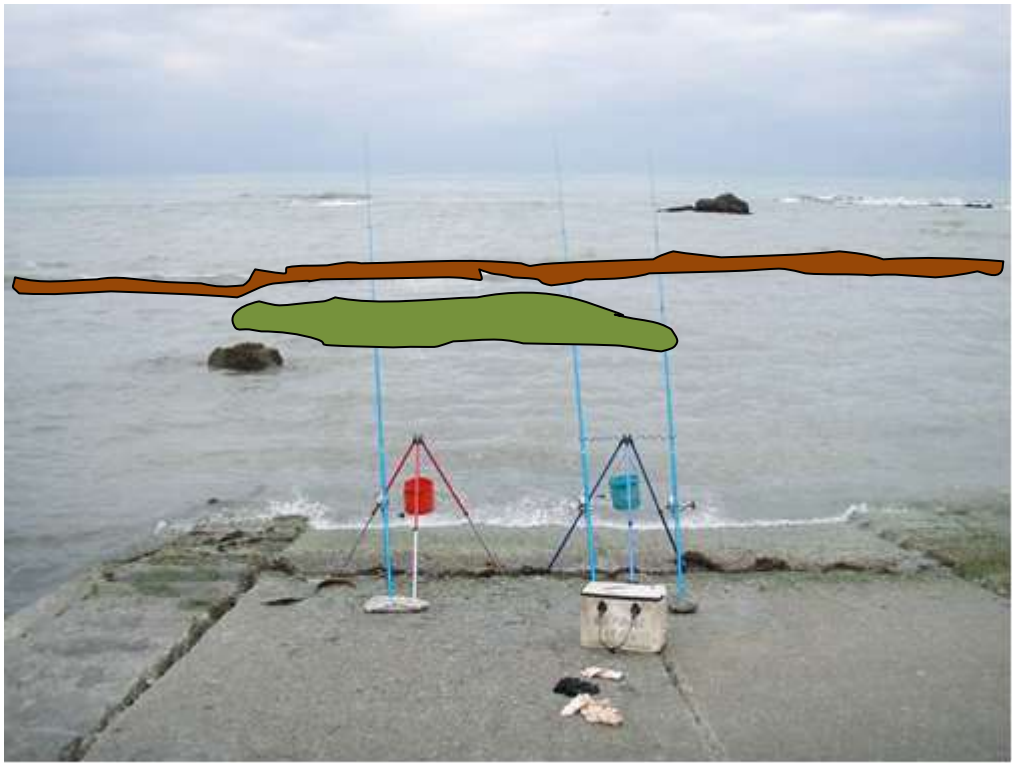
やはり、自然から感じ取ることのできる野生の本能のようなものをもう一度、取り戻す必要があるように思うがどうだろ。その感性は、これからの世界を生き抜く為には、大変重要な必須条件の一つになるのではなかろうか。

日高管内の浦河港に大量に打ち上げられたイワシ（ネット画像より）

潮が大きく引き始めた三時頃、舟揚場の前にちょこっと姿を現し始めた岩盤の前に出て立ち込みで釣り始めた。駆け上がりの昆布根原にドボン、ドボンとゴロを打っていると、それに４０㎝弱のカジカが来た。これでようやく二本目である。さらに大きな岩に向かって遠投をかけてもアタリは出ない。誰かが背後の潮だまりを漕いで私のところにやって来

た。「北海道釣名人会」の近江聡氏であった。春立漁港左の浜で、名人会三名で釣りをしていたが、一人二本ずつのカジカをとっただけで、アタリも途絶えてしまい、付近の様子を見て歩いているというのだ。私も同じような現状を伝え、お互いに諦めないで最後まで頑張りましょうとエールを送り合った。

　そのうちに潮がひたひたと打ち寄せてくるようになり、また舟揚場に戻らざるを得なくなった。その後、大アブラコは釣れず、竿を揺らしたのはチビハゴトコとチビアカハラだけだった。



白波の立っている所で竿を設置したが、潮が満ちて来たので、元の舟揚場に戻った。
左に見える岩の向こうから右にかけて少し深くなっており、青草が茂っていた。
満潮時はカジカが岸よりしてきそうだ。
白波が立っている所が駆け上がりになっており、昆布が茂っている。

本日の釣果カジカ２本。他はアカハラとハゴトコだった。

本日の朝は、氷点下まで冷え込んだことを除けば、風や波も治まり、比較的良い条件での釣りとなった。しかし、マイワシの来襲に原因があるのかどうかは分からないが、みなさん低迷した大会となった。

第六回までの成績では吉井氏が他を大きく引き離し、彼が大コケでもしない限り、年間優勝は間違いないと思われていた。彼は大アブラコや大カジカの実績がある三石盈進を的に絞ったが、年間には関係のない者が「隣で釣るかな」と茶化しても、全く意に介しない素振りだった。しかし、実のところは、ハゴトコ四匹の惨めな結果に終わり、プレッシャーに弱い吉井氏を露呈してしまうこととなった。

優勝者は入船に入った嵐氏で、マイワシの恩恵に与らなかったカツオ好きのカジカを選り分けて釣り上げてきた。当初は大狩部と聞いていたのだが、急遽どこからか情報が入ったのか入船に変更した結果である。残念だったのは、佐々木清氏が持ってきた二枚のタカノハだった。釣り上げた時は規定に届いていたのだが、審査時には二枚とも３５㎝にほんのわずかに届いておらず涙を呑む結果となった。私は、最期に釣り上げたカジカで身長優勝だった。

審査後は、あらかじめ予約を入れておいた「いずみ食堂」で田舎ソバを食べた。あのもっちりとして歪(いびつ)で不揃いの太麺と、揚げ物でより一層際立つ昆布出汁とが絡み合い、絶妙なハーモニーを醸し出していた。ソバに舌鼓を打っていると、「北海道釣名人会」のツワモノどもがやって来た。金井泰樹氏が私たちの席に立ち寄ってくれた。東静内港周辺に釣り座を構えた金井氏は、５１．３㎝を頭にアブラコ五本、４４．３㎝ほかカジカ五本で準優

勝にしかならなかったそうだ。ネットを付けて８０ｍほど先にある沖根を狙ってアブラコを抜いたというから凄まじい。私の８０ｍといえば、何もつけないスバリでようやく届くようなところだ。

なんでも優勝した窪田敏明氏は春立漁港周辺一帯を攻め、５４．９㎝を頭にアブラコ六本、４６．５㎝ほかカジカ四本を揃えたということだ。他に春立周辺では三位の三上秀夫氏が５１㎝、五位の渡辺英二氏が５１．５㎝のアブラコをものにしていたという。春立という同じような条件下でもこれだけの釣果の差を見せつけられては、私の不釣はやっぱり腕の差ということにしかならないだろう。

職場の若い二人の女子職員がカジカを食べるというので切り分けて持って行った。頭は入れずにおいた。頭はいい出汁が出るのだが、気味悪いと思われるからだ。私が見てもカジカの頭はＧＯＤＺＩＬＬＡの頭に似ていると思う。

さて、今年計画された大会は事故もなくすべて無事終了することが出来た。会の運営の方も岩見沢「とんとん会」との合同大会を二回実施することにより、運営費を節約することが出来た。なにより岩見沢で組織された二つの釣り会の交流が深められたことが大きな収穫といえるだろう。

「いずみ食堂」のソバはやはり旨かった。